『日台大辞典』と東アジア共通漢字

中　澤　信　幸
（文化システム専攻言語科学領域担当）

はじめに

かつて日本が台湾を統治していた時代に，『日台大辞典』を始めとした日本語と台湾語との対訳辞書が作られた。これらは植民地統治という現実的な要請の中で編纂されたものではあるが，その内容は日本語と台湾語とを総合的に対照させたものであり，現代にも通用する貴重な資料となっている。本稿では『日台大辞典』に付載される「日台字音便覧」を取り上げ，その歴史資料としての有用性を明らかにするとともに，将来的にも「東アジア共通漢字」として活用することが可能であることを述べる。

1　日本漢字音と中国語諸方言

1.1　中国語中古音と日本漢字音

日本の漢字音は言うまでもなく中国から伝えられた漢字に付随していたものである。こんにち「呉音」と呼ばれる漢字音はもっとも早く伝えられたもので，恐らくは 6 世紀頃の六朝期の中国語音を反映していると考えられる。（ただし正確な母胎音はいまだ明らかになっていない。）一方，こんにち「漢音」と呼ばれる漢字音は，7 世紀以降の隋・唐時代に中国との正式な国交を経て伝えられたもので，都のあった長安（西安）など北方の中国語音を反映している。呉音・漢音ともに中国の音韻史で言えば「中古期」の音を反映していることになる。したがって日本漢字音の，特に漢音の研究にあたっては，この「中国語中古音」との対照がよく行われる。

この中国語中古音は，『切韻』（601 年成）の流れを汲む「切韻系韻書」，特に『大宋重修広韻』（『広韻』，1008 年成）を調査することによって明らかにされている。主な特徴としては，現代中国語（北京語）には存在しない清音（無声音）と濁音（有声音）との区別があること，-m 韻尾と-n 韻尾との区別があること，入声韻尾（-p, -t, -k）が存在することなどが挙げられる。この入声韻尾は日本漢字音では，例えば

-p　→　－フ（「立→リフ」「法→ホフ」など）
-t　→　－チ，－ツ（「日→ニチ」「鉄→テツ」など）
-k　→　－キ，－ク（「駅→エキ」「学→ガク」など）

のように開音節化して表される。

中国語中古音の特徴は日本漢字音だけでなく，やはり中国の影響下で大量に漢語を取り入れた，朝鮮語・ベトナム（越南）語の漢字音にも見られる。例えば「学生」の発音は

日本語　→　がくせい［gak se:］
朝鮮語　→　학생［hak sɛŋ］
ベトナム語　→　hoc sinh（クォック・グー）

のようにいずれも入声韻尾-k が見られるが，これはもとは同じ語であった証拠に他ならない。

現代中国で標準語とされる北京語では入声韻尾-k は消滅しており，「学生」は「xúe shēng」（ピンイン）となる。この例でも明らかなように，現代北京語音は日本語・朝鮮語・ベトナム語の漢字音とはかけ離れたものとなっている。しかし現代中国語諸方言の中には，北京語音とは異なり日本漢字音などとの近似性を想起させるものも存在するのである。

1.2　現代中国語諸方言

現代中国語の方言は，次の七つに大別される[1]。

・北方方言―揚子江沿岸から北，および西南部に

[1] 詹伯慧（1983），西田龍雄（2000）等参照。

至る広大な地域。漢族人口の 70%。北京語など。華北方言，西北方言，西南方言，江淮（こうわい）方言（揚子江と淮（わい）水流域）に細分される。

・湘方言―湖南省。新湘語（長沙方言など）と古湘語（双峰方言）に分けられる。

・贛（かん）方言―江西省の大部分。南昌方言など。

・呉方言―江浙方言（蘇州方言など）と浙南方言（紹興方言など）に分けられる。上海語は単純化する方向に発展した近代呉語。

・客家（はっか）方言―広東省東北部（梅県方言など），福建省西部，江西省南部。その他広西チワン族自治区南部，湖南省，四川省，台湾にも客家方言を話す人たちがいる。

・粤（えつ）方言―広東語とも。広東省中部（香港・マカオ）・西南部，広西の東南部。五つの下位方言に分けられる。

・閩（びん）方言―福佬（福老）語とも。福建省，台湾（台湾語），海南島など。閩北・閩南または閩北・閩東・閩南に下位分類される。それぞれの差は激しい。また白話音（俗音）と文語音（読書音）の二つの層が存在する。文語音は都のあった北方の標準音が伝わったものである。

以上の七大方言の中国における分布は，図１の通りである。

さて，ここでそれぞれの方言の音節構造を挙げると，以下のようになる。

・粤方言（広東）
　(C)V　(C)V＋{m, n, ŋ　　(C)V＋{p, t, k

・客家方言（梅県）
　(C)V　(C)V＋{m, n, ŋ　　(C)V＋{p, t, k

・閩方言（厦門）
　(C)V　(C)V＋{m, n, ŋ, (N)
　(C)V＋{p, t, k, (ʔ)

・贛方言（南昌）
　(C)V　(C)V＋{n, ŋ　　(C)V＋{t, k

・湘方言（長沙・双峰）
　(C)V　(C)V＋{ŋ, N

・呉方言（蘇州）
　(C)V　(C)V＋{N, ʔ

・北方方言（北京・瀋陽）

図１　現代中国語方言分布地図（詹伯慧 1983 より）

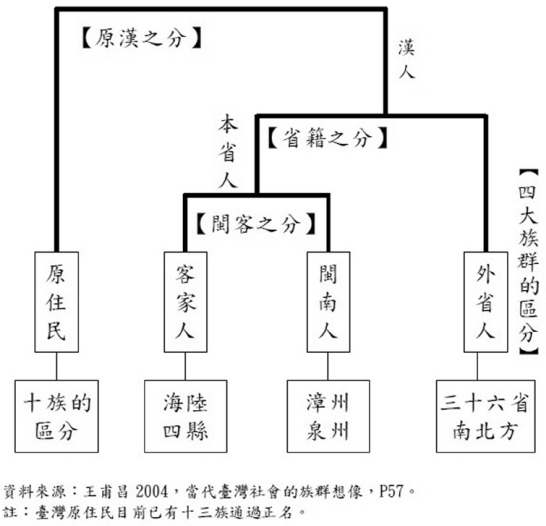

圖 4-1　臺灣四大族群在人群上的組成

図 2　台湾の 4 大エスニックグループ（行政院客家委員会 2008 より）

(C)V　(C)V＋{n, ŋ

（「N」は鼻音韻尾に/m/ /n/ /ŋ/の区別がないこと，「ʔ」は入声韻尾に/p/ /t/ /k/の区別がないことを表す。）

これを見ると，南から北へ移動するにつれて音節の数が減っていることがわかるであろう。先に中古音の特徴として挙げた-m 韻尾と-n 韻尾との区別，および入声韻尾（-p, -t, -k）については揚子江流域あたりでなくなるのである。橋本萬太郎（1978）は中国の中におけるこれらの差異について，これらは共通の祖語を持つものではなく，もともとは別の言語であったものが，ゆるやかに同化や借用を繰り返して現在のようになったとした。これが「言語類型地理論」である。この説に立つならば，現代中国語諸方言は漢語を大量に「借用」しているという点で，日本語・朝鮮語・ベトナム語と本質的には変わらないと言える。ただその言語における漢語の占める割合が違うだけなのである。

先に日本語・朝鮮語・ベトナム語における「学生」の発音を挙げたが，ここで中国語諸方言における「学生」の発音を挙げておこう。

北京語（北方方言）　→　xúe shēng

上海語（呉方言）　→　hhok^{5} san

広東語（粤方言）　→　hok^{6} saang^{1}

台湾語（閩方言）　→　hak^{8} seng^{1}

（上海語以下の数字は声調を表す。）

北京語以外はすべて入声韻尾-k が見られる。（ただし上海語の-k は閉鎖音[ʔ]。）やはりもとは同じ漢語であったことがわかる。

2　台湾の言語状況と日本統治時代

『日台大辞典』が編纂された台湾であるが，その言語状況は非常に複雑である。ここで台湾における現代および日本統治時代の言語状況について見ておくことにしよう。

2.1　現代台湾の言語状況

現代の台湾では，大まかに図 2 にあるような四つのエスニックグループが存在する。すなわち台湾にもともと住んでいた原住民[2]のグループ，福建省南部の泉州や漳州などから最初に移住してきた閩南人（福老人）のグループ，次に移住してきた客家人のグループ，そして第二次世界大戦後（光復後）に移住してきた「外省人」と呼ばれるグループである。この各グループの人口内訳については

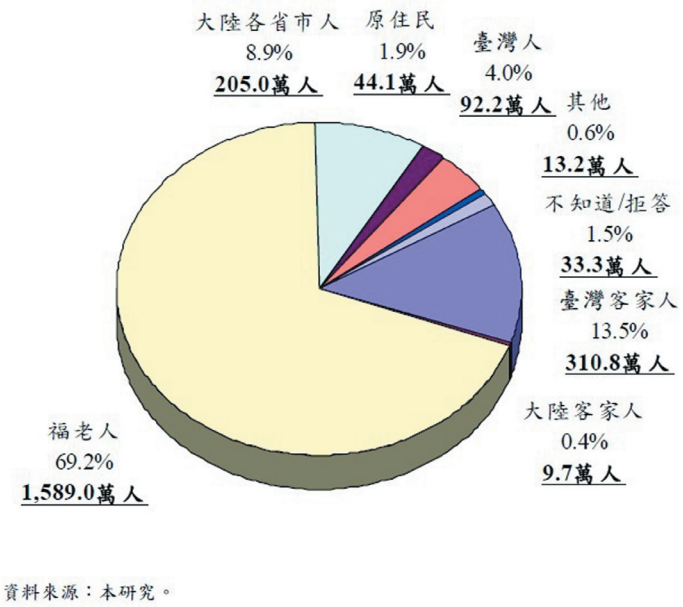

図 3　台湾のエスニックグループ所属人口（自己意識・単一回答）（行政院客家委員会 2008 より）

さまざまな統計があるが，行政院客家委員会による 2008 年の統計は図 3 の通りである。「自分は福老人（閩南人）」という意識を持っている人が約 7 割を占めていることがわかる。

このようなエスニックグループの存在に伴い，言語も原住民諸語，台湾語（閩南語，福老語），客家語，そして光復後に標準語とされた北京語が存在する。学校教育では主に北京語が使われることもあり，最近の若者には（閩南人，客家人であっても）北京語しか話せない人も少なくない。もっとも現在では北京語以外の言語も見直され，学校においても台湾語（閩南語），客家語，原住民諸語の教育が行われている。

現代台湾における言語・方言の分布状況は図 4 の通りである。台湾語（閩南語）が西側の海岸部を占め，客家語が山麓部，原住民諸語が中央山脈から東側海岸にかけて分布しているのがわかるであろう。

2.2　日本統治時代の言語状況

台湾は日清戦争後の 1895 年から 1945 年まで日本の統治下にあった。その間の言語の状況についてもさまざまな統計があるが，ここでは 1907 年（明治 40）刊行の台湾総督府編『日台大辞典』「緒言」に記載されている統計を挙げる。

一，日本語	50,000 人
二，支那語	
1.南部福建語	
ア，漳州語	1,200,000
イ，泉州語	1,100,000
2.客人語（又ハ広東語）	500,000
3.其他ノ支那語	40,000
三，蕃語	
1.熟蕃語	10,000
2.生蕃語	100,000

[2] 台湾の原住民族は日本統治時代には「熟蕃」（平地住民），「生蕃」（山地住民）などと呼ばれ，「生蕃」は後に「高砂族」と呼称された。光復後は「高砂族」は「高山族」と改められたが，現在は「原住民」が正式名称となっている。（なお台湾では「先住民」という呼称は用いられない。）2008 年現在，14 の原住民族が正式に認定されている。「行政院原住民族委員会」の web サイト http: //www.apc.gov.tw/portal/index.html および「国立教育資料館　原住民教育」の web サイト http://3d.nioerar.edu.tw/2d/native/default.asp 参照。

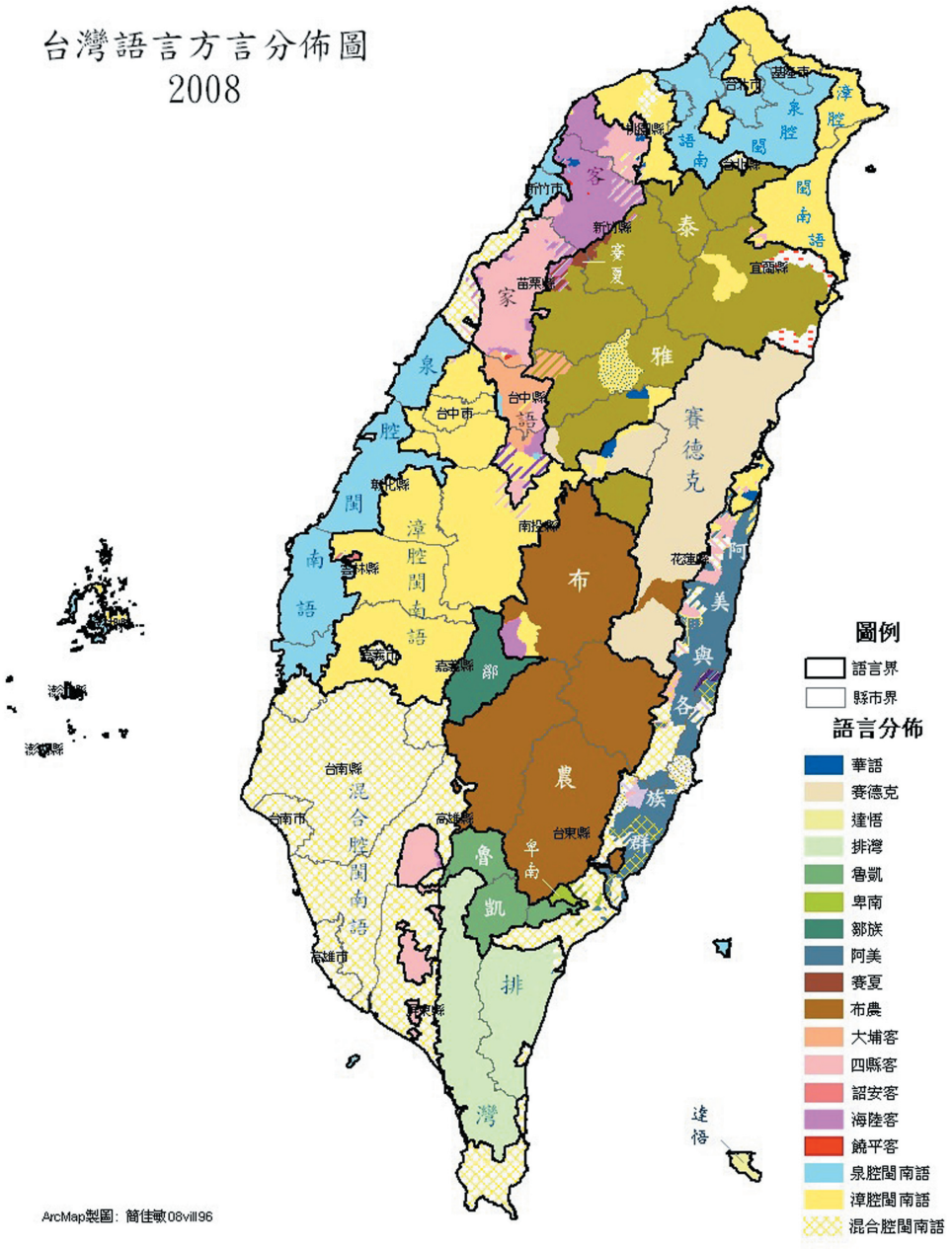

図 4　台湾の言語方言分布図（洪惟仁 2010 より）

3,000,000

（「緒言」pp.1-2。原文は縦書き漢数字。）

この統計では台湾の全人口を 300 万人とし，そのうち南部福建語（閩南語）は 76.7%，客人語（客家語）は 16.7%，蕃語（原住民語）は 3.7%の人たちによって話されているとしている。全人口は現在の約 7 分の 1 であるが，各グループ間の比率は現在とそれほど変わりはないと言える。

同じ『日台大辞典』付載の「台湾言語分布図」を図 5 に示す。これも現在の分布（図 4）と比べて大差はないと言えるであろう。

3　『日台大辞典』と「日台字音便覧」

3.1　『日台大辞典』について

1895 年（明治 28）に日清戦争が終結し，その後の講和条約で日本が台湾を統治することになると，統治上の必要から台湾語（閩南語）の研究が始められた。そして台湾総督府を中心に，以下の

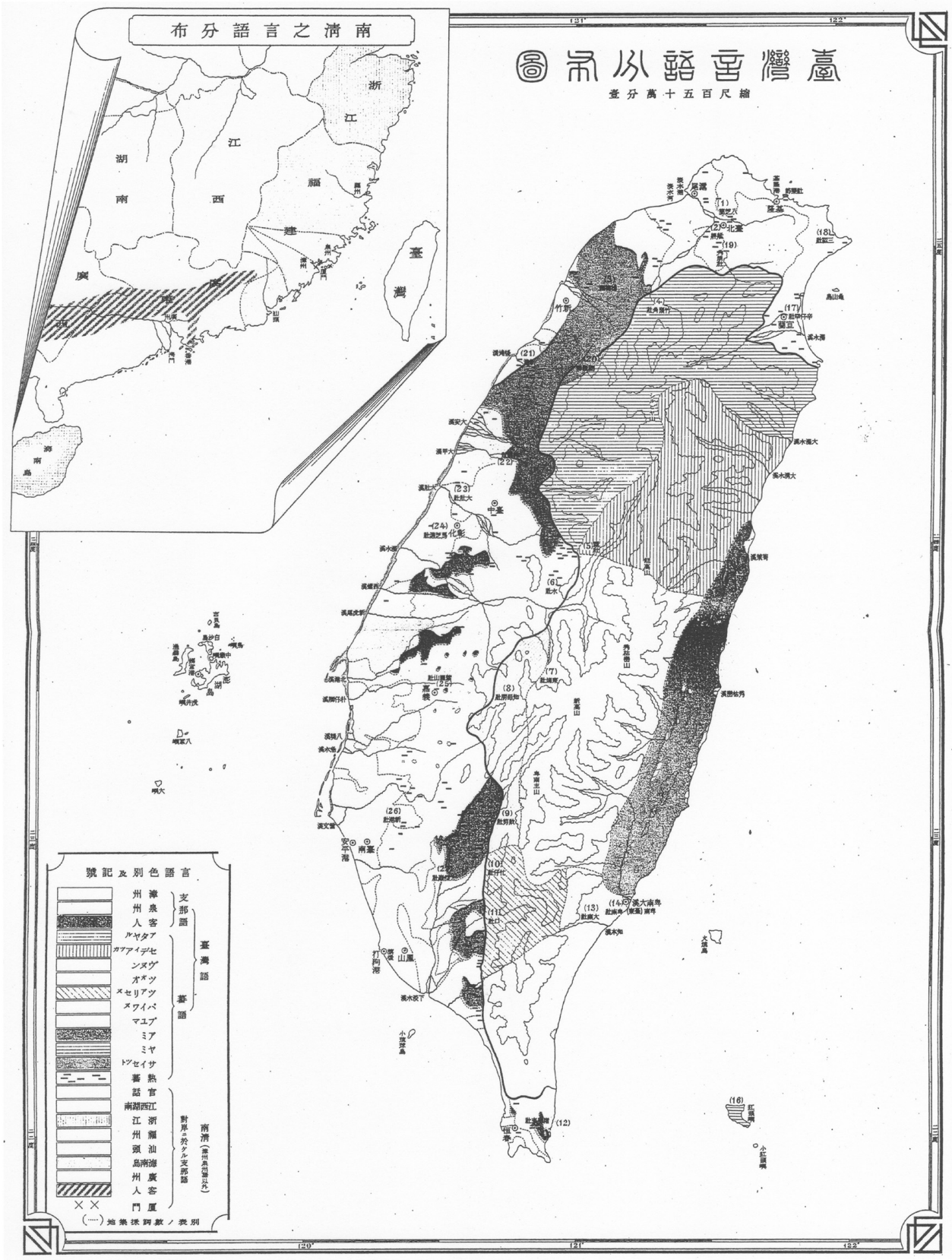

図５　『日台大辞典』付載「台湾言語分布図」

日臺大辭典

ア

ア(代)彼。「―ノ人」彼個人。「―ノ品」彼號物。〔アレ〕。

ア(感)唯。唯。嗄。口。嗄。「―ト答エル」應。唯。〔オオ。アイ〕。

ア(感)嗚呼。唉。喲。噯。喲。口。嗄。口。〔アア。アラ〕。

アア(副)如彼。如此。如此。生。「―イウ風ニスル」照彼。欵。照彼。樣。〔アノヨオニ〕。

アア(感)嗚呼。啊。嗄。唉。噯。喲。口。嗄。口。〔アラ〕。

アアチ(名)綠門。用樹葩結的門。

アアメン(感)耶蘇教禮拜的時念的話。

アイ(あひ)(名)間。中間。其中。「山―」山縫。山隙。〔アイダ。アワイ〕。◉「酒ノ―オスル」伴。食酒。鬥。對食酒。〔アイテ〕。

アイ(あゆ)(名)鮎。國姓魚。鱤魚。

アイ(名)愛。惜。愛。愛。痛。保。惜。情義。情。愛。「子ノ―ニ溺レル」溺愛子。一味愛子。〔イックシミ。ジョオアイ〕。

アイ(あゐ)(名)藍。菁。◉「木」大菁。「一種」小菁。「一種」番菁。◉「色」藍色。「―ヨリ出テ―ヨリ青シ」青勝於藍。〔アオ〕。

アイ(あひ)(名)遇。會面。相會。「―ニユク」去與伊會面。〔メンカイ〕。

アイ(あひ)(副)相。相。相。相合。「―思ウ」大家數念。對頭相思。〔タガイニ。トモニ〕。◉「―ナラヌ」不可。

アイ(感)唯。唯。口。嗄。嗄。〔ハイ。ヘイ〕。

アイアイガサ(あひあひがさ)(名)相相傘。相合雨傘。相合遮。

アイイク(名)愛育。保養。保養。養。飼。

アイイロ(あゐいろ)(名)藍色。藍色。

アイイン(あひいん)(名)合印。合印。合同。〔ワリイン〕。

アイウチ(あひうち)(名)相打。對頭有打着。計々有打着。◉「死」對頭計劍死。

アイエンキエン(あひえんきえん)(名)合緣氣緣。緣份。五百斤鹽鑄一個鍋。

アイオイ(あひおい)(名)相老。偕老。百年偕老。夫妻保老。〔カイロオ〕。

アイオイ(あひおひ)(名)相生。同齊發。發平長。

図6　『日台大辞典』本編冒頭

図7　『日台大辞典』付載「日台字音便覧」冒頭

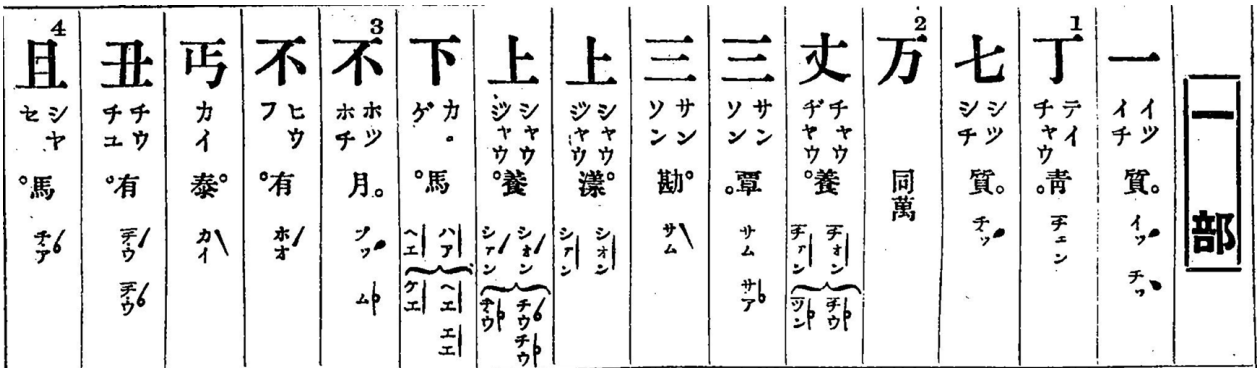

図 8 「日台字音便覧」冒頭「一部」

ような日本語と台湾語との対訳辞書が編纂された。

- 『日台小字典』―上田万年・小川尚義主編。台湾総督府民政部学務課発行。1898 年(明治 31)刊。
- 『日台新辞典』―杉房之助編。日本物産合資会社支店発行。1904 年（明治 37）刊。
- 『日台大辞典』―小川尚義主編。台湾総督府民政部総務局学務課発行。1907 年（明治 40）刊。
- 『日台小辞典』―小川尚義主編。大日本図書株式会社発行。1908 年（明治 41）刊。
- 『台日新辞書』―東方孝義編。台湾総督府警務局内台湾警察協会発行。1931 年（昭和 6）刊。
- 『台日大辞典』―小川尚義主編。台湾総督府発行。1931～32 年（昭和 6～7）刊。
- 『台日小辞典』―台湾総督府編・発行。1932 年（昭和 7）刊。
- 『新訂日台大辞典』上巻―小川尚義主編。台湾総督府。1938 年（昭和 13）刊。

これらの辞書の中でも代表的なものが『日台大辞典』と『台日大辞典』で，いずれも台湾総督府の編修官だった小川尚義の主編によるものである。

『日台大辞典』では冒頭に伊藤博文による題字，台湾総督府民政長官の後藤新平による序文が付けられ，「台湾言語分布図」（図 5）「台湾語数詞比較表」の後に，2.2 でも挙げた「日台大辞典緒言」が 212 頁にわたって付けられる。この「緒言」は台湾語に関する精緻な研究となっており，中国語研究史上でも特筆されるべき内容である。その後「台湾語ノ発音」が 18 頁にわたって付けられ，「凡例」の後に本編である「日台大辞典」が続く。図 6 はその最初の頁である。本編は 1,184 頁におよぶが，その後に「画引日台字音便覧」が 66 頁にわたって続く。その後「百家姓」「台湾地名」「旧台湾度量衡附貨幣，時間」「血族ニ対スル称呼」と続き，最後に小川尚義による「本書編纂ノ顚末」で終わる[3]。

3.2 「日台字音便覧」について

『日台大辞典』の本編に続くもので，正式な名称は「画引日台字音便覧」である。その名の通り漢字が部首の画数順に排列され，それに日本漢字音（漢音・呉音），韻（平水韻），台湾語音が記される。台湾語音は第 1 段に読書音，第 2 段以降に俗音が，それぞれ厦門音と漳州音とに分けて（または厦門・漳州共通音として）片仮名で示される。全部で 66 頁あり，1 頁あたり 6 段，1 段あたり 19 行で，1 行ごとに 1 字の掲出漢字，および漢字音などが掲載される。図 7 はその最初の頁，また図 8 はその最初の段である。掲出漢字は全部で 7,283 字におよぶが，352 字については「同～」「俗～字」のような異体字注記となっており，音注は付されない。したがって音注が付される字は 6,931 字となる[4]。

[3] 『日台大辞典』の編纂と内容に関しては，村上嘉英（1966）および（2004）参照。

表１「日台字音便覧」データベースのサンプル

No.	掲出字	部首	画数	頁	段	漢音	呉音	漢呉共通	韻	声調	読共通１	八声	鼻音	読共通２	八声	鼻音	読厦門	八声	鼻音	読ｼｮｳ州	八声	鼻音
1	一	いち	0	1	1	イツ	イチ		質	入	イッ	上入										
2	丁	いち	1	1	1	テイ	チャウ		青	平	｜チェン	上平										
3	七	いち	1	1	1	シツ	シチ		質	入	チ・ッ	上入										
4	万	いち	2	1	1																	
5	丈	いち	2	1	1	チャウ	ヂャウ		陽	上							｜チォン	下去		｜チァン	下去	
6	三	いち	2	1	1	サン	ソン		覃	平	サム	上平										
7	三	いち	2	1	1	サン	ソン		覃	去	サム	上去										
8	上	いち	2	1	1	シャウ	ジャウ		陽	去							シォン	下去		シァン	下去	
9	上	いち	2	1	1	シャウ	ジャウ		陽	上							シォン	上声		シァン	上声	
10	下	いち	2	1	1	カ	ゲ		麻	上							ハア	下去		ヘエ	下去	
11	不	いち	3	1	1	ホツ	ホチ		月	入	プッ	上入										
12	不	いち	3	1	1	ヒウ	フ		尤	上	ホオ	上声										
13	丐	いち	3	1	1			カイ	泰	去	カイ	上去										
14	丑	いち	3	1	1	チウ	チユ		尤	上	｜チ・ウ	上声										
15	且	いち	4	1	1	シヤ	セ		麻	上	チ・ア	上声	鼻									

3.3 「日台字音便覧」の有用性

『日台大辞典』および「日台字音便覧」は，台湾領有という時代の要請の中で，必要に迫られて作られた実用的なものである。ただし凡例で

> 漢呉音ノ假名遣ハ，主トシテ太田方氏ノ漢呉音圖ニ據リタレドモ，多少ノ變更ヲナセル處アリ（p.6）

と述べられるように，日本漢字音については江戸時代の国学における字音研究を受け継いでいる[5]。つまりこの「日台字音便覧」の日本漢字音をつぶさに見ていくことで，江戸時代以来の「字音仮名遣い」継承の実態が解明できるのである。江戸時代に盛んに研究された「字音仮名遣い」が現代の漢和辞典などへ継承される過程については，必ずしも明らかにはなっていない。「日台字音便覧」はまさにその過渡期に位置付けられるものであり，「字音仮名遣い」継承の実態を知るための貴重な資料となり得るのである。

また，『日台大辞典』で行われたのは初めての本格的な台湾語研究であり，日本語と台湾語との対照であった。「日台字音便覧」も，日本漢字音と台湾語音との初めての総合的な対照研究と言える。厦門音と漳州音のみで泉州音が載せられていないという問題はあるものの[6]，「日台字音便覧」は当時の台湾語音を知ることのできる貴重な資料でもある。

3.4 「日台字音便覧」データベース

この先人の遺産とも言うべき「日台字音便覧」であるが，紙媒体の状態では部首の画数順での検索しかできず，使い勝手は良くない。これを活用するためには，現代のパソコン技術を利用したデータベース化が有効である。そこで本稿の筆者は表１のような「日台字音便覧」データベースを完成させた[7]。

このデータベースの完成により，7,000 以上の漢字が容易に検索でき，その明治時代における「字音仮名遣い」，また日本統治時代における台湾語音が簡単に見られるようになった。

またこのデータベースは過去の漢字音研究だけでなく，現代の日台対照研究に応用することも可能である。すなわち江戸時代以来の「字音仮名遣い」に基づく日本漢字音を現代の実態に合うように置き換え，台湾語音も片仮名からローマ字に置き換えるのである。もちろん台湾語音そのものも現代の実態に合うように置き換える必要がある[8]が，これらはデータベースの活用により比較的簡

[4]「日台字音便覧」の詳細については中澤（2010）参照。なお中澤（2010）では掲出漢字を 7,277 字，音注が付される字を 6,925 字としていたが，正確には本稿で述べる通りである。ここに訂正する。

[5]「太田方氏ノ漢呉音圖」とは，太田全斎『漢呉音図』（文化 12 年成，1815）を指す。

[6] 洪惟仁（1993）では，「日台字音便覧」について次のように述べられる。

> 後附〈日臺字音便覽〉羅列漢字的日語吳音、漢音、俗音及閩南語厦門、漳州的文白異讀，是閩南語漢字音讀的重要史料。只可惜未能列出泉州音，否則價值當更高。

[7] 平成 21 年度山形大学人文学部「独創的・萌芽的研究支援」および山形大学学生の協力による。今後その成果を公開していく予定である。

[8] 現代台湾語の諸調査を応用することで可能となる。特に王順隆（2004）は，日本統治時代の辞典を現代に合うように再編しており，有用である。

単に実現できるであろう。

さらに日本語と台湾語だけでなく，北京語音，上海語音，広東語音，また朝鮮漢字音，ベトナム（越南）漢字音をこのデータベースに入れていくことで，「東アジア共通漢字」一覧の作成も可能となるのである。

4 「東アジア共通漢字」の可能性

4.1 現代の「東アジア共通漢字」

東アジアではかつて「漢字文化圏」が存在し，漢語が共通語彙となっていた。そして現代でも東アジアの各言語に漢語は多く存在する。その漢語から共通して用いられる漢字をピックアップし，一覧化したものを本稿では「東アジア共通漢字」と命名する。ただしこれは単なるピックアップではなく，現代の東アジアにおけるコミュニケーションに生かすことを目的とするものである。これを利用すれば，例えば現代では「世界語」となった英語に頼らずとも，母語に含まれる漢語を利用した効率的なコミュニケーションが可能となるはずである。

東アジア各国相互の関係は，今後さらに緊密になる。「東アジア共同体」も実現するかも知れない。そこで英語や中国語（北京語）だけでなく，上海語，広東語，台湾語，朝鮮語（韓国語），ベトナム語を使いこなせれば，さらに円滑なコミュニケーションが可能となる。「東アジア共通漢字」を利用すれば，この夢のような話も決して不可能ではないのである。

4.2 「東アジア共通漢字」一覧の作成

そこで本稿では「日台字音便覧」データベースを応用した，表２のような「東アジア共通漢字」一覧の作成を提案する。

掲出字の後には，各言語での発音を対照できるように表示する。単漢字だけではわかりにくい言語もあるので，最後に語例（熟語）を挙げる。特に朝鮮語，ベトナム語のような現在では漢字で表記されない言語では，これは必須である。また東アジア全体ではなく一部の地域のみで使われる語例も，積極的に挙げることにする。

日本向けには「日本語音」を最初に表示するが，これは地域によって変えても良い。例えば中国向けには「北京語音」を最初に表示すれば，使いやすい表となるであろう。さらに地域によっては「湘語音」「贛語音」「客家語音」などを加えて充実させても良い。

文字を選定する上では，各言語の「基本漢語」，さらにそこから「基本漢字」をリストアップする必要がある。そのためには各言語の語彙調査が欠かせない。字数としては，「日台字音便覧」では7,283字が収録されるが，これでは多すぎてかえって不便である。2010年（平成22）に改定された「常用漢字表」は2,136字となっているが，やはり現実的な数字としては2～3,000字程度となろう。

課題としては，漢字の排列方法が挙げられる。部首の画数順，全画数順，五十音順，アルファベット順，韻引きなどが考えられるが，これは地域によって変えても良いであろう。

漢字表記は日本で使われる新字体，台湾で使われる繁体字（日本の旧字体にあたる），中国で使われる簡体字などがあるが，これらはすべて併記した方が良いであろう。ただしその順番は地域によって変えても良い。また朝鮮語，ベトナム語の

表２ 「東アジア共通漢字」一覧のイメージ

	日本	北京	上海	広東	台湾	朝鮮	ベトナム	語例
一	イツ/イチ	yī	yik^{4}	yat^{1}	chit^{8} / it^{4}	일イル	môt / nhât	一日　統一
学（學）	ガク	xúe	hhok^{5}	hok^{6}	hak^{8}	학ハク	hoc	学生　学校
日	ジツ/ニチ	rì	zhek^{5}	yat^{6}	jit^{8}	일イル	nhât	日記　日本

ように現代では漢字で表記されない言語では，ハングルやクォック・グーを併記するとともに，語例（熟語）を挙げることで補う必要がある。

また発音表記の問題もある。地域ごとの表記に従う，アルファベットに統一する，あるいはIPA（国際音声字母）にするといった案が考えられるが，これも地域によって変えても良いであろう。

この一覧を冊子にする場合，旅行などでも使えるようになるべく携帯しやすいものとしたい。またweb版の作成も目指すが，その構成としては一覧表形式にするか，あるいは検索を中心とするかという問題もある。いずれにしても，パソコンやスマートフォンなどで利用しやすい構成としたい。

おわりに

古代の中国では，漢語が周辺の他言語と同化や借用を繰り返しながら少しずつ伝播していった。それは中国の内部に留まらず，朝鮮半島やベトナム，日本にも及んだのである。そのため東アジアの各言語では，古代の漢語の名残が現代でも色濃く残っている。しかしこの漢語を現代の東アジアにおけるコミュニケーションに生かそうという試みは，まだまだ少ないのが現状である[9]。

そこで本稿では，『日台大辞典』付載の「日台字音便覧」を生かした「東アジア共通漢字」一覧の作成を提案した。『日台大辞典』は植民地統治のために作られた「過去の遺物」であるが，その内容は現代，そして未来にも応用できるのである。過去の植民地統治を否定するあまり，先人の研究成果まで受け継がれないのは不幸なことである。私たちはこれを未来の東アジアのために受け継ぐ義務がある[10]。

[9] 各言語における漢字の発音を対照させたものとしては，鄧応烈（2002）がある。また日中韓における漢語の意味を比較したものとしては，佐藤貢悦・嚴錫仁（2010）がある。

[10] 本稿で述べた構想をもとにした研究が，日本学術振興会の平成23年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）に採択されている。（課題番号：23520544，研究課題名：現代版「日台字音便覧」データベースの整備と「日台基本漢字」発音対照表の構築，研究代表者：中澤信幸）

引用文献

王順隆（2004）『新編台日大辞典』

行政院客家委員会（2008）『97年度全國客家人口基礎資料調査研究』

洪惟仁（1993）日據時代的辭書編纂（『閩南語經典辭書彙編7　臺日大辭典〈上巻〉』所収，武陵出版有限公司）

洪惟仁（2010）「台湾の言語地理学はどこまで進んだか？」（『地域言語』21）

佐藤貢悦・嚴錫仁（2010）『日中韓同字異義小辞典』（勉誠出版）

詹伯慧（1983）『現代漢語方言』（樋口靖訳，光生館）

鄧応烈（2002）『両万漢字中日韓越英俄読音釈義字典』（上海辞書出版社）

中澤信幸（2010）「『日台大辞典』付載「日台字音便覧」について」（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』7）

西田龍雄（2000）『東アジア諸言語の研究Ⅰ　巨大言語群―シナ・チベット語族の展望』（京都大学学術出版会）

橋本萬太郎（1978）『言語類型地理論』（弘文堂，『橋本萬太郎著作集』第一巻所収，内山書店，2000）

村上嘉英（1966）「日本人の台湾における閩南語研究（『日本文化』45）

村上嘉英（2004）「日本人の台湾語学習と研究の事始め　―序に代えて―」（王順隆編『新編台日大辞典』所収）

附記　本稿は2011年2月19日に行われた山形大学人文学部国際学術講演会「共振する東アジア2―東アジアの言語の将来―」での発表内容をもとに，加筆修正したものである。講演会でさまざまなご意見をくださった方々に感謝申し上げる次第です。

《日台大辭典》與東亞共通漢字

中澤　信幸

（文化系統專攻語言科學領域担当）

日本統治台灣時期，1907 年出版的《日台大辭典》首開先河成為日台雙語互譯辭書的力作。此書是為適應當時日本殖民統治的需要而編纂，但由於其對日語與台語進行了有效的綜合對照研究，及至現代一直都是非常具有參考價值的珍貴資料。《日台大辭典》附錄的「日台字音便覽」不僅可用作歷史研究，相信在將來對於「東亞共通漢字」的研究也會頗有助益。古代中國時期，漢語隨著不斷與周邊地區各種語言的同化、被借用等形式，超越中國本土，逐漸傳播到了朝鮮半島、越南、日本等地。正因如此，直到現代東亞各語言中都鮮明地保留了古代漢語的痕跡。但是到目前為止，將古代漢語打造成東亞現代共通語言的嘗試還少之又少。為此，本稿提案以「日台字音便覽」為基礎，添加北京語音、上海語音、廣東語音、朝鮮漢字音、越南漢字音等，促成「東亞共通漢字」便覽的編纂工作。